生活に何かと役立つ連載コラム

つぶやきがんちゃんの

生活知恵袋

せいかつちえぶくろ

Vol. 110

今月のテーマ　子どもとお金を考える Part.3

子どもとお金をテーマに書き始めたが、ついついPart.3まで来てしまった。原稿を書くにつれて問題の所在が大きいことを筆者自らが改めて考えさせられている次第だ。金かねと、お金が何よりも大切なように聞こえてしまいかねないが、勿論そういうことではない。

人類が誕生してから文化が発展する段階に応じて、世の中にお金が登場してくる。経済が高度化する程その役割は重要になり、今やその存在無くしては成り立たない。それほど大切なものだけに、お金をめぐる問題は避けて通れない。何度も「金融リテラシー」という言葉を出しているが、金融・経済が複雑化している今日にあっては、“最低限の金融知識や情報を正確に理解し、自らが判断し行動できる能力”を身につけることは、とりわけ重要な意味を持つ。この度、子どもとお金をテーマにしている理由もそこに在り、親・保護者は勿論、教育関係者をはじめ社会全体が子供への教育の責任を負わなければならない。何故なら、最低限の金融の知識と自らが判断する能力が欠落してしまうと、子供の将来や家計、はたまた人格形成にまで影響を及ぼしてしまうからだ。お金の使い方や、貯蓄に対する考え方などの経済観念や金銭感覚を確立することは、社会人としての自立と自律には不可欠なのである。“そんな難しい問題を子どものころから身につけるのは厳しいのでは”と思う向きもあるだろうが、子どもの頃にこそ根付くのである。金銭感覚がマヒし、またはズレたまま大人になってしまうと、そこから修正することの方が難しいのである。

某製紙会社の御曹司の事件を思い出した…。東大卒で仕事の面では有望視されてはいたものの、会社の55億円ものお金をギャンブルに使い、刑務所行きになったというものである。裕福な家庭で何不自由なく育ち、いつの間にか金銭感覚がマヒしていたのかもしれない。

お金は、あるに越したことはないが、あったらあったで使い方や管理の方法についてはそれ相応の注意が必要だ。

●金銭感覚って何？

金銭感覚の意味を調べてみると「お金に関する認識や使い方など、金銭面に関する生活感覚（考え方や意識）のこと」とあった。これだけでは、分かったような分からないような…？もう少し調べていくと①金額の大きい・小さいに対する感じ方、②お金をどのように使うのかの感覚、③お金を何のため使うのかの意識、これらのことが含まれているようだ。1000円のウナギ弁当を高いとみるか、安いとみるかとか…。臨時収入でパーっと飲みに行くか、とりあえず貯金しようか…。などなど、お金に対する考え方や意識の違いを言うようだ。

よく、“金銭感覚がマヒしている“とか“金銭感覚がズレている“などというが、マヒやズレが生じている状態はどういう事態を招くのだろうか…!?後先を考えず借金する人、あればあるだけ使ってしまう人、欲しいものには金額をいとわない人などの金銭感覚は、ともすれば人生の崩壊につながりかねない。

●金銭感覚と価値観

金銭感覚と価値観は大きく関係する。普段何気に使っている価値観という言葉はいったい何を意味するのかを改めて考えてみよう。辞書で調べてみると、「何に価値があると認めるかに関する考え方」とある。単に金銭的なことに限らず、“善・悪“や“好ましいこと・好ましくないこと“、などといった価値を判断するときの根底となるものの見方のようだ。

齋藤廣勝（さいとう　ひろかつ）
株式会社トータルライフサポート代表取締役
・CFP®サーティファイドファイナンシャルプランナー
・1級ファイナンシャルプランニング技能士
・日本商工会議所　年金・退職金等認定講師
・住宅ローンアドバイザー
・金融広報アドバイザー

こちら

保険と暮らしの相談センター

“生命保険でこんなお悩みはございませんか!?”

◆ 保険の見直しを検討している
◆ 加入している保険が本当に良いのかわからない
◆ 更新時期が近く、保険料がアップしてしまう
◆ 将来の子供の教育費が心配

相談は無料!!
納得いくまで相談できます。

お気軽にご相談ください。

TLS total life support　募集代理店　株式会社 トータルライフサポート
〒010-0916　秋田市泉北3丁目17-22
● 営業時間／9:30～18:30
（土・日・祝日は9:30～17:00）
● 定休日／水曜日
TEL 018-827-7611
FAX 018-827-7610
URL http://tls-akita.co.jp

詳細はホームページでもご覧いただけます。

家計支出においては、住居・教育・自動車・保険・趣味・レジャー・食事・健康など、何を優先してお金を使うのかということは、金銭感覚のみならず価値観の違いも大きく関係してくる。また、誰にお金を優先して使うのか…?子ども、配偶者、はたまた自分なのか。これらの感覚の違いは、言い換えれば生活感覚と言ってもいいのかもしれない。

金銭感覚と価値観が形成されるには、育ってきた環境に大きく左右される。裕福な家庭環境で育った人が必ずしも贅沢をしているわけではないし、収入の少ない環境で育った人が倹約しているかというとそうでもないが、いずれ問題を抱えたまま大人になってしまった場合の金銭感覚は、簡単に変えられるものではない。「三つ子の魂百まで」ではないが、健全な経済観念は性格と同様に幼いころからの積み上げが重要なのである。

●金銭感覚や価値観のズレの果ては

具体的に金銭感覚や価値観のズレは何をもたらすのか…。ズバリ、社会においても家庭においても、関係の維持・存続に決定的な意味を持つ。離婚原因にも良く出てくるように、その相違は深刻な事態に発展しかねない。

恋愛や婚活の末、めでたく結婚と相成り結婚生活がスタートする。それぞれが長年違う環境で生活してきただけに、様々な点で違いがあることも事実だ。それぞれの個性も尊重し、理解しあうことが大切だが、結婚相手との金銭感覚や価値観は、結婚後に安定した生活を送る上で、とても重要な要素となる。仮に堅実なタイプと浪費的なタイプの人が結婚するとどうなるのか…。お金の使い方をめぐる考え方、いわゆる金銭感覚は長年の間に身に付いたものだけに、すぐに変えることは難しい。堅実と浪費を単に定義づけることは難しいが、世の中には使うべき時にも出し渋る、堅実とは言い難い「ただのケチ」と思われるような人もいる。お金は、使うべきことに使ってこそ価値があるのだが、根本的な価値観と金銭感覚の大きなズレは、婚姻の継続を難しくしてしまう。そうならないためにも、恋愛や婚活における相手選びは、お互いの金銭感覚と価値観を共有できるパートナーを選ぶことが望ましい。恋人たちよ、お金のことを話題にしよう。しかし、100%の一致はあり得ないし、それぞれの違いを認め合うことも重要で、結婚後に育むことも修正することの努力も大切だ。夫婦と言えど、別人格であることを忘れてはならない。あれっ…!いつの間にか恋愛論になったか!?

言いたいことは、大人になってから深刻な事態にならないためにも、幼い頃からの金銭教育が重要だということだ。

●幼い頃の金銭感覚から

小さな子どもは自分の金銭感覚が、他と比較してどう違うかなど考えたことも無いはずだ。読者の皆さんも自分が幼い頃のことを考えて欲しい。もらったお小遣いの使い道が、友達とどう違うかなどを考えたことは、ほぼほぼ無いだろう。しかし、成長して周りが見えてくるにつれ、少しずつ違和感を覚えるようになり、社会人になってからのお金の使い方にあっては、あまりの金銭感覚の違いに驚いたことも少なくないのではないだろうか。飲み会の会計前の行動や、身に着けているものの違い、ぜいたく品の購入や遊興費への支出などなど…。それ自体、誰に迷惑をかけている訳ではないかもしれないし、身の丈にあった物であればどうこう言われる筋合いもない。しかし、常識を超えた出し渋りは、コミュニケーションを阻害したり、周りに対して不快感を与えたりする。

子どもの頃の生活環境は、後の金銭感覚に少なからず影響を与える。とりわけ、家庭環境が豊かでない環境に育つと、おのずとやりくり上手な金銭感覚が身に付き、裕福な家庭に育つと"どんぶり勘定"になりかねない。そして、逆もまた真なりであるからややこしい。

●小学生への金銭教育

子どもの金銭感覚がどう育つのか?家庭環境が影響することは、先にも述べた通り否めない事実だ。子どもは、家庭の経済環境を選択できないし、金銭感覚を自然に身に付けることも難しい。であれば、家庭内のしつけや教育現場など、社会全体での金銭教育が大切になってくる。何度か「金融リテラシーマップ」の存在を取り上げてきたが、各年齢層に応じた習得すべき事項を今一度確認してみてほしい。

大袈裟な言い方かもしれないが、金銭感覚の欠落は人生そのものの崩壊に繋がりかねない。小さなことかもしれないが、お小遣いの渡し方や使い道を一緒に考えてみよう。

●小学校低学年のお小遣い

そもそも、お小遣いはあげた方が良いのだろうか。あげるとしたら"いつから""いくらから"が良いのか迷うところだが、その前にお小遣いの目的をはっきりさせておこう。

私の考えとしては、お小遣いそのものを目的とするのではなく、お小遣いを通してお金と上手に付き合うための練習と位置付けたい。決められた金額内で一定期間をやり繰りし、"使えばなくなってしまう"という当たり前の感覚を身に付けてほしい。欲しいものを手に入れるためには我慢をし、"貯めてから買う"という達成感も併せて身に付けてもらいたいものだ。そういう意味では、お小遣いは金銭感覚を身に付ける訓練であるとも言える。しかし、お小遣いをあげることだけで金銭感覚が自然に身に付くわけではないし、放置することは逆効果にもなりかねない。口を出しすぎることも良くないが、訓練であることを考えれば、計画的な使い方を一緒に考えてあげたり、最初はお小遣い帳を付けるお手伝いをすることも大切だ。お金は無限ではなく使うと減っていくということ、お金は家族が働いて得られること、感謝し大切にしなければならないことを、自ら感じてもらいたいものだ。

金融広報中央委員会「子どものくらしとお金に関する調査」によると、小学生のおよそ8割が、なにかしらの形でお小遣いを貰っているようで、小学校低学年で月1回と定めている家庭では、500～700円とするところが最も多い。金額の問題ではなく、子ども自身が工夫することや、お金の管理や使い方を学ぶことを大切にしたい。

何不自由なく育った子供の将来が、自立した後に育った環境と同じように裕福であるとは限らない。愛するわが子が社会人として経済的に自立し、健全な金銭感覚を持った自律のためには、金銭教育は避けて通れない。場合によっては、あえて与えない勇気も必要なのかもしれない。

●来月号は

「子どもとお金」に関してはまだまだ書き足りないが、西日本の大災害に関連したことにも触れたい。もう少し考えてから決めよう…。